雨の死神

翳鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨の死神

【Ｎコード】
Ｎ２９２６Ｚ

【作者名】
翳鴉

【あらすじ】
雨の日に一人立っている少女。そんな所に幼い少年が傘を渡してくれた。
そして１０年後…。

プロローグ

ある雨の日――――。

「…誰も、僕の事を信じてくれない。」

雨の日――――。

「…世界が無くなれば良い。」

雨の日――――。

「…人間など…所詮…。」

少女は一人、雨の中を歩いていた。

「ちょっと、お姉ちゃん。」

「…！？…。」

幼い少年は少女に話しかけてきて、傘を渡した。

「お姉ちゃん、風邪引く。」

「…なぜ…？。」

「だって、母ちゃんも父ちゃんも人には優しくしろって？」

「！？…。そうか。」

「じゃあね。」

幼い少年は雨の中を走って行った。

そして、少女はどこかに消えていってしまった。

「…雨が好きな人間はいるのだろうか……。」

1句　日常変化

「要！さっさと起きる！」
ガラッ！ガラッ！
女の人が部屋のカーテンを開ける。
「ん？…。」
ベッドには、少年が寝ていた。
「要！さっさとおきなさい！」
「…今何時？」
「7時45分よ。」
「…ふわぁ～…。」
少年は用意を始める。
「朝ごはんできてるから。」
「ん。分かった。」
少年はあいまいな返事をする。
少年の名前は『時雨要（しぐれかなめ）』中学2年生。

要の中学校は学ランではなく、高校生などが着る制服でいいらしい。

「はい、要。お弁当！」
「ありがとな、ねぇちゃん。じゃあ行ってくる。」
要は口にパンをくわえて家を出た。

「……。」
要はとても、マイペース。

「うわぁーん！」
子供が道中で泣いていた。
「ん？…どうした？」

「お母さんがいなくなったの。」
「そうか、じゃあお兄ちゃんが一緒に探してやるよ」ニコッ
「ありがとう！」
そして、要は子供の母親を見つけて、学校に向かう。
時刻０８：１０――――。

「…ん？あっゴミ。」
要は道に落ちてるゴミを公園のゴミ箱にまで入れる。
「はぁ～…今日も平和な日常だなぁ～」
要はとても親切？というか、そう言う”正義感”がある。

「あっ…遅刻するな。」
要はパンを全て食べる。
そして、いつものように、登校する。

「ふわぁ～…眠い。」
「おっす！時雨！」
「ん？…澤倉？なんだ？」
「相変わらずだな。お前は。」
「？？。」
「いいから、さっさと行かないと遅刻するぞ！！」
「知ってる。」
要は成績優秀、女子にも男子にもそこそこ人気者。
先生にも頼られる事が多いが。
あまりのマイペースに結構ウザがられる事もある。

ガラッ
教室に入り、席に着く。
要の席は窓際の一番後ろの席。

「時雨君！ここ、教えてほしいの。いいかな？」
「ん？…別にいいけど。」
要は誰にでも親切で優しい。

タッ…。
「…雨が降ってない日は嫌いだ…。」
電信柱の上に立つ少女、小さな傘を広げていた。

「雨…。」
「雨がどうかしたの？時雨君？」
「いや…。」
要は窓から外を見る。
ガラッ
「……要！！！」
「ん？」
バコンッ！！
「！？…。」
「時雨君大丈夫？」
いきなり要が少女に殴られる。
「痛ッ…。」
「あんたね！告白されてもっと言い方とか無いわけ！！」
「…呉羽（くれは）？…。」
「聞け！！人の話！」
少女の名前は『笹野呉羽（ささのくれは）』要の幼馴染。
「何？…。」

「昨日、告白されたんでしょう？なら！断る言い方を考えろ！！！」
「…はぁ～…悪かったよ。」
「！？…私に謝られても困るし！」
要は素直に謝る。呉羽は頬を赤くして目をそらして言う。
「俺に告白しても、意味無いのに。」
「えっ？どうしてよ？」
「俺、幼い頃からずっと思ってる人がいるしな。」
「！？…。」
「えっ！！！！！！！！！！」
クラス中、全員が驚いていた。
「？？？。」

「…時雨要…。」ボソッ
少女は、傘の持つところに書いてある名前を読んだ。

2句　始まりの出会い

「…匂う。」
少女は突然電信柱から消えた。

ドクンッ！
「！？…。」
「時雨君？」
「あっいや…なんでもない。」
要は少し顔色が悪かった。
なんだ？今の違和感…。

そして、空は曇り。

やがて、雨になった。

「雨だ、天気予報と違う。」
「…雨…。」

ドクンッ！
「…！？…。」

『…人間とは、珍しい物だ…。』

「！？…お前は誰だ！」
「！？…えっ？時雨君？」

「あっ…ごめん。」
要はそっと教室から出ていった。

「見つけた。」
「えっ！？…。」
要が廊下に出る、そしたら窓から化け物が要を襲う。
「！？…。」
スッ！
「なっ！？」

「居ない。」
化け物は消える。

タッ
「…平気か？…。」
「あっ…おう。」
「…あまり、浮かれていると喰われるぞ…。」
「喰われる？」
「…呆れる、まぁいい。」
傘を持った少女は呆れた顔をする。
「お前は？誰だ？」
「…雨神（うしん）。」
「って…なんで俺雨降ってるのに、ぬれてないんだ？」
「…それは私が神だから。」
「神？」
「見つけた。」
「…チッ…。」
雨神は要を抱えて、飛ぶ。

「なんだアレ！」
「…あれは、”死魔（カク）”能力を持っている人間を喰う。」
「何！？…。だけど俺には能力なんて…。」
「…ある。かつて私がお前に授けた能力。」
「はぁ？」
タッ
地面に着地して、走る。

「…雨、突き刺され。」
雨神が傘を化け物に向ける。
そして、雨は氷のようにとがる。
そして、化け物に突き刺さる。
「グワァァァァァァ！！！！」
化け物から、血が大量に出てくる。

「…逃げるぞ。」
「あっ！…。」
「…人間は本当に哀れだ。」
「……。」

『お姉ちゃん、濡れちゃうよ。』

なぜだ…なぜ、歳を取っていない。

「…再生を始めたか。」
「えっ？」
化け物の傷は全て再生する。

「…さっさと、目を覚ませ！。」
「！？…俺に言われても困る！」
「…我は神、雨を宿す…その力で我の力となれ！」
雨が化け物に降り注ぐ。
その雨はとても暑い雨。
「グワァァァァァ！！！」
「…あいつはあんな攻撃じゃ、死なない。」
「えっ？…神だろうあんた！」
「…私は、お前に力をあたえ、もう半分しか力が無い。」
「！？…。」
「…思い出せ！あの日私とであった思い出を！」
ドクンッ！
「！？…。」
要の様子がおかしかった。

『…人間、力がほしいと思わないか？』
『ほしいよ、誰かを守れるようなそんな力が。』
『…なら私がやろう…また１０年後その力は発揮される。』
『お姉ちゃんと出会うか分からないよ？』
『…それもそうだな。』

「！？…雨神とであったあの日…俺は死神になった！」

3句　死神から貰った力

「…その力は何でも出せる力。」
「何でも？」
「…要が望めば何でも出る。」
「分かった。」
要は集中する。

俺が望む…俺は、死魔（こいつ）を倒す力がほしい。

「…そうか、なら私がやろう。その力を。」
「はぁ？…。」
「…。」
「！？…。」
雨神が要にキスをする。

ドクンッ！
「！？…。」
要の手から剣が出てきた。
「なっ！…剣？」
「…要にはよく似合っているな。」
「そうか？まぁ良い！」
「グワァァァァァァァァ！！！！！！！！」
死魔が叫ぶ。
「…お前の力を発揮しろ。」
「分かってる！！」
要は剣を強く握る。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
ジャキッ！！！
「グワァァァァァァァァ！！！！！！」
死魔は真っ二つになって、血を流して倒れて消えた。
「…やったのか？」
「…あぁ、よくや…。」
ガクッ！
「雨神！」
雨神が突然しゃがみこむ。
「…大丈夫だ、ただ力を使いすぎただけだ…。」
「そうか？なら、いいけど。」
雨神は立ち上がる。
「…それで、要は家に帰るのか？」
「あっおう、雨神は？」
「…私に家など無いが…今は雨が降っている傘。」
「あっ…これ、昔俺が…。」
要が傘を見て言う。

「捨てないで居てくれたんだな！ありがとな！」ニコッ
「…別に、気に入っただけで…。」
「まぁ、だけど、ありがとう！」ニコッ
「…いいから、さっさと帰れ。私は要の見張りをしている。」
「はいはい！じゃあな！雨神！」ニコッ
「……。」
そして、傘が無くなった途端に、雨神に雨が掛かった。
要を見ると、まったく濡れていなかった。

「…傘が無いと、自分自身じゃいられない…。」

雨神の体が少し震えているように見える。
そして、いつしか雨神は消えていた。

「……。」

あの時も、何も無い私に、あの子供が話しかけた。
こんな化け物みたいな私に、傘を渡してくれた。
嬉しかった。
こんな人間もいるんだなって思えて…。

「要…。」
雨神はビショ濡れになりながら、一人で歩いていた。

4句　不幸な日々？　1

ガラッ
「ん？…。」
5時ちょっと前に、要の部屋の窓が開いた。
タッ…。
「…誰？」
「…雨神。」
「何！って…何してるんだよ！！」
「…傘を返してくれないか？」
「あっ…はい。」
要は雨神に傘を返した。
「…邪魔したな。」
雨神は窓から出て行った。
「なんだったんだ？…。」
要はベッドに寝転がる。

タッ
「…ん？なんだ、死魔か。」
雨神の目の前には、一人の少女が居た。
「！？…。」

「ふわぁ…眠い。」
「いってらっしゃい。」
要は、いつもより早く学校に向かった。

ブーッ！！！
バイクが要をひこうとする。
「……。」
タッ
要が軽くよけた。
「あぶねぇーの。」
要はそのまま気にせず学校に向かった。

そして、なぜか学校には、いつもより早くついた。

「…ハァ…ハァ…グッ…。」

タッタッ
要が階段を上がる。

「…私では倒せない…。」

ガラッ
「！？…。」
「…要…。」
「雨神！」
要の目の前には、壁にもたれて肩から血を流してる雨神だった。
「雨神、何が合った！」
「…すまない、私は…。」
「雨神…。」
「見つけたよ。雨神ちゃぁ～ん」ニコッ
「！？…。」
「えへへへへ」ニコッ
一人の少女が微笑みながら槍を投げる。

グイッ！！

ドスッ！！

「なっ！？…あっぶねぇー。」

「…要…。」

学校半分がなくなるほどの威力だった。

「当たらなかったかぁ～」ニコッ

「お前誰だ！」

「私？私は、亞隈（あくま）。」

「亞隈？…。」

「そう、死魔とは違って人型で力も能力も違う！！」ニコッ

「…要、逃げろ。」

「何言ってるんだよ！お前はどうなるんだよ！」

「…あいつは、お前が勝てる相手じゃない…。」

「雨神！俺を信じてくれ。」

ドクンッ！

「！？…。」

雨神はそのまま、気を失ってしまった。

スッ

「あれ？君が相手？」

「そうだな、俺は時雨要！」

「そっか、私は亞隈のナクル。」

要は鎧を着て、周りには無限に存在する刃が出ていた。

5句　不幸な日々？　2

カキンッ！！！
「チッ！」
「やるねぇ～、死神に力貰ってここまでできたの、君が初めてだよ」
ニコッ
「余裕こいてると、後で知らんからな！！」
ドスッ！
壁に刀が刺さる。
「貰った！！」
「…。」
「何！？」
刀がナクルに襲い掛かる。
「なんてね。」
「！？…。」
「氷線氷刃（ひょうせんひょうは）！！」
刀が全て凍り、粉々になってしまった。

「……。」
「君はおしい。だけど倒せない。」
「俺は、雨神を守るそれだけだ！！！！」
「その正義を壊してあげるよ！！！」
「…雨の刃。」
グサッ！！！！
「！？…なっ…。」
ナクルに雨の刃が刺さった。
「…雨神！…。」
「…ハァ…ハァ…グッ…私の勝ちだな…。」
「チッ…今日は多めに見てやるよ！！」

ナクルは消えた。

「…ハァ…ハァ…グッ…。」

「雨神！」

要の術も解ける。

「大丈夫か？」

「…あぁ…たいしたことはない…。」

「そうか。」

「…大丈夫だ…。」

雨神はよろよろ立ち上がる。

「…雨よ…幻覚。」

学校全体が元どうりになった。

「戻った？」

「…私の幻覚…だが、私が死ねば解ける。」

「そうか…。」

「…学校の時間だ…私は行く。」

「雨神！」

後ろを向いたが、雨神は消えていた。

雨神…ごめん。

「…要…。」

「Ｚｚｚｚ。」

「うっそ…。」

呉羽は自分の席で寝ている要に驚いていた。

「ん？…どうした？呉羽？」

要が目を覚ます。
「どうして！！いつもなら、私が一番なのに！！」
「…別に、気分気分。」
「何よ！！告白とかされてるからっていい気にならないでよ！！」
呉羽は頬を赤めて強めに言う。
「そうだな…いい気になってたな。ごめん。」
「！？…な、何よ！それで許されたと思ってるの！」
「俺は強くなるんだ。雨神を守れるような男に。」
「！？…雨神？誰よそれ！！」
「別に、呉羽に関係ないし。」
呉羽は要は聞くが要は教えてはくれなかった。

誰よ！雨神って…要のバカ！何で気づかないの？…。

「…私も、そろそろ、人間観察をするか…。」

ガラッ
先生が教室に入ってくる。
「転入生を紹介する。」
「えっ？こんな時期に？」
「入って来い。」
ガラッ

「ん？…なっ！！」
ガタッ！！
要が驚いて立ち上がる。

「うわぁぁぁ！！！可愛いじゃん！！」
「俺タイプ！！！！」
男子達がとても、興奮していた。
「転入生の、雨神瑞羅（うしんみずら）さんだ。」
「…雨神瑞羅。よろしく頼む。」
雨神が要の学校に転入してきた。

「ヤバイ！！超クールでカッコイイ！！」

「じゃあ、雨神は、時雨の隣。」
「…分かった。」
「時雨、教えてやってくれ。」
「あっ…おう。」
要は動揺を隠し切れないほど、動揺していた。

カタッ
雨神が席に座る。

「おい、雨神。何してるんだよ。」ボソッ
「…人間観察だ。要と居る方がすきだしな。」ボソッ
「！？…そうかよ…。」
要は頬を真っ赤に染めていた。

何よ！！要の奴！！ちやほらされてるからっていい気に成り上がって！！！！

6句　不幸な日々？　3

「…時雨君、私に学校案内をしてくれないか？」
「あっいいぜ」ニコッ
「…ありがとう。」
「ちょっと待った！！！！！」
要と雨神が教室を出ようとするが、呉羽が止める。
「ん？どうかしたのか？呉羽？」
「…呉羽？」
「俺の幼馴染でこのクラスの委員長だよ。」
「…そうなのか？」
「クラスの事聞くときは呉羽に聞くといいぜ」ニコッ
「…分かった。そうする。」
「ちょっと！人の話聞きなさいよ！！」
二人の仲を呉羽がさえぎる。

「なんだ？…。」
「…呉羽さん。」
「何？雨神さん？」
「…この頃妙に苛々するか？」
「えっ？まぁ、うん。それがどうした？」
「…あっ別に、何でもないぞ。時雨君、案内してくれないか？」
「了解。」
そして、二人は教室を出た。

「あの二人、仲いいよねぇー。」
「出来てるんじゃない？」
「だけど、委員長いるでしょうー？」
「二股？」

「あぁ！！！！！もう！！！！鬱陶しいのよ！！！！！！！！！！！」
呉羽は教室で叫ぶ。

「さっき、何か見えたのか？」
「…あの呉羽という人間、死魔にとりつかれてる。」
「はぁ！？」
「…早く、倒さないと、呉羽は死ぬぞ？」
「！？…駄目だ！呉羽は死なせない！必ず、俺が守ってみせる！」
タッ
「！？…。」
雨神が急に右足を地面につけて、頭を下げて言った。
「…それがあなたの覚悟なら、私は一生あなたの物になります。」
「！？…サンキュな！雨神！」ニコッ

まったく…人間と言う物は…。

ドクンッ！
「？！…。」
「委員長？」

何？…苦しい…要！…助けて！要！！！

バタンッ
「委員長！！」
呉羽が教室で倒れた。

「…現れた。」
「急ぐぞ！！」
雨神と要は教室に戻る。

ガラッ！
「！？…。」
「はははははははは！！！楽しいわ！」
「呉羽！」
「あぁ？」
呉羽は血だらけだった。
そして、呉羽の周りには死体がいっぱい倒れていた。
「呉羽？…。」
「…貴様、人間ではないのか？」
「はははは、私の名は亜隈の呉羽！！。」
「亜隈？…呉羽が？…。」
「…要、戦わないのか？」
「俺は…倒せない！」
「…貴様の覚悟はそんな物だったのか…。」
「死ねばいいわ。」
呉羽が帽子から、無数の人形を出す。
そして、人形は武器を持って要に襲い掛かる。

「…！！！」
グサッ！！！！！

「！？…。」
「…貴様は…私が…守る…ううん、守りたい！…。」
「！？…雨神…。」
ドクンッ！

「ははははははは！！！血だ！！！！」
ドスッ！！
「！？…。」
呉羽が雨神の体を素手で刺す。
「…！？…ガハッ！…。」
雨神は血を吐いた。

「…雨…神…。」
ドクンッ！
「…私は…平気だ…。」
バタンッ…。
「…！？…。」
ドクンッ！
「…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

7句　守る人

雨神が！…。

雨神が血を流して気を失っている。

「雨神！おい！」

「ははははははは、死んじゃった！」ニヤッ

ドクンッ！

「！？…。」

俺が助けてもらった…。

ドクンッ！

俺は守れなかった…。

ドクンッ

「…俺は…。」

「……守って…見せてくれ…。」

「！？…雨神。」

「……貴様の…力を…。」

「…分かった！俺は、守る！」

ドクンッ！！！！

俺に力を、誰もかもを守れるようなそんな力を俺にくれ！！！

「…グッ…。」

雨神はよろよろ座り込む。

血はもう止まっていた、傷は遅いが治り始めていた。
「…やはり…貴様は…選んで正解だったな…。」
そして、要の目の前には。

「!?…これは?…。」
銀色に光る刃が出てきた。

「…それが、要の武器になる。」
「俺の?」
「…そう、だから…もう何も恐れるな。」
「!?…分かった!!!」
「死ねばいいのになぁ〜か・え・る!!」
呉羽は巨大なかえるを出す。
「なっ!?デカッ!!!!」
要は武器を取る。そして構える。
「…できる。」
「守ってみせる!」
かえるを炎を吐き出す。

「…我、死神の力を宿した人間に属性の力を…。」
そして、要の刃が光った。

「なんだ!?」
「…要は炎を使う、剣士(きし)か、合っているな。」
「俺は、守る!そのためなら!!!」
「グワァァァァァァァァ!!!!!!!!」
かえるがはいた炎が要達の目の前に来る。

「氷炎華（ひょうえんか）！！！！！」
氷と炎が混ざり合った攻撃がかえる事吹き飛ばす。
「！？…まぁ、いっか。今日はここまで。バイバイ」ニコッ
呉羽は消えた。

ヨロッ！
バタンッ！
「…要！」
要は武器を消して、倒れる。
「エへへへ、俺守れたかな？」
「…守れたよ、私を守ってくれた。」
「そっか…。ＺＺＺ」
そのまま要は眠ってしまった。

人間はこうも可愛いものなのだな。

8句　知り合いの神様

タッ
「♪～♪～♪～」
ロリータ系の服を着て、鼻歌を歌いながら歩いている少女が居た。
「…偉くご機嫌のようだな。」
ドキッ！！
「！？…。」
少女が驚き止まる。
「うわぁぁぁぁぁぁ！！！！雨神！！！！」
「…相変わらず、気色悪い格好だな。零神（ぜろがみ）。」
「うっせな！お前に何がわかる！！この可愛い服を見ろ！」

「ん？…なんだ？雨神？」
二人の声に目覚める、要。
そして、窓を開ける。
「あっ、雨神！おはよー、ちょっと待ってて！」
「…分かった。」
そして、窓を閉める要。

「誰だ？」
「…私の契約者だ。」
「マジかよ！」
「…うるさいな！女装してる男に言われたくない！このド変態！」
「ド変態だと！この俺を変態呼ばわりするとは！なんという奴！！」
「…こんな奴ですけど。」
「相変わらずむかつくな！！！」
「…フン。」

ガチャッ
「ん？誰だ？その女の人は？」
「…要、気にするな。」
「？？まぁ、いいけど。」
「…後、女は男だ。」
「！？…マジで！」
「…零神という、私と同じ神だが、私は死神だから私のほうが強いという事だ。」
「はぁ！？あたしの方が強いわよ！」
「…何、女口調にしてんだよ、てか胸ないな。」
ギクッ！
「！？…別にいいじゃない！何よ！あんたがでかいからって！」
「…誰もそこまで言ってないが。」
「！？…何よ！胸が小さくて悪いわね！」
「…お前男だろう？胸無いか、あるかでお前は到底無いだろう？男だし、な、要。」
「えっ？！…俺に振る？」
「…悪かった、なんでもない。学校に行くぞ。」
「おう。」
こうして、零神をおいて二人は学校に行く。

「雨神！あんたの、契約者よりあたしの契約者の方が強いんだからね！！」
「…嘘をつくな。」
ムカッ！
「何よ！もう！！」
そして、零神は消えた。
「なんだ？それ？」
「あぁ、神は全員契約者を見つけるんだ。」
「そうなのか？」

「…私の契約者は要。契約者が強くなれば、神も強くなるという事だ。」
「ふ～ん。」
「…まぁ、今日の夜は、神の鼎の日だから、神の世界に行くぞ。」
「はぁ！？マジで！！」
「…そうだ。お前の力を見てもらう審査だ。」
「！？…ぅ。」
要はとてつもなく不安な顔をする。
「…覚悟と自分自身の信頼と私を信じろ。」
「！？……わ…分かった。」
「…それでいい。」
要は頬を赤くして納得する。

「雨神に負けないでよね。」
「知ってる、俺に任せれば。」

9句　神様会議　1

「…今日は、神様会議がある。要も参加するのだ。」
「!?…俺が?」
「…そうだ。お前が参加しなければ意味が無いからな。」
「分かった。どんなところなんだ?」
「…行ってみてからのお楽しみだ。」
「はぁ、やっぱりか?。」
そして、要の部屋に置いている鏡。
「鏡に何かあるのか?」
「…我は雨の死神、神様の居る世界、神界(しんかい)に繋がる扉よ、開け。」
バリンッ!
鏡が割れた。
「!?…。」
「…行くぞ。」
「えっ?」
グイッ!
「うわぁ!雨神!!!!」
要は無理矢理雨神と共に鏡の中に入った。

って…ヤバイ…意識が持ってかれて…。

「…おい、要。起きろ。」
パチッ
「ん?…!?…アレ?俺?」
「神界の力にあてられたのだな。」

「…そっか。」
「大丈夫か？」
「平気。」
「雨神様！」
「！？…。」
一人の人形を持った少女が雨神に抱きつく。
「お久しぶりです！」ニコッ
「忌神（きしん）。久しぶりだな。」
「えへへへ。」
忌神という少女はとても、雨神になついていた。
「忌神。どこ？。」
「あぁ、契約者が呼んでるから、もう行きます！」ニコッ
「おう、気をつけてな。」
「はい！」ニコッ
忌神は契約者の元に向かった。
「誰だ？」
「忌神、とてもいい子だけど、とても哀れな死神だ。」
「そうなんだ。」
「そろそろ、行くか。」
「おう。」
そして、雨神たちの目の前には大きな扉があった。

ガラッ
そして、扉が開いた。
「…まぁ、そう緊張しなくても構わない。」
「…分かってるよ…。」
こうして、二人は扉の向こうに行った。
「！？…。」
要達の他にいっぱい、死神や人間が居た。

「こんなに居るのか…。」
「…当たり前だ。死神と神様を合わせて何人居ると思っている。」
「そうだったな。」
タッ！
「あら？雨神じゃない。」
「ん？なんだ、貴様か。」
「何よ！その興味なさげ！」
「女装する男には興味ない。」
「なっ！…別にあたしはね！！」
「…うるさいな。」ボソッ
「なっ！…。」
「私に何か用か？貴様と会って、苛々するんだ。」
「！？…。」
雨神は少し冷めた目で零神を見る。
「…うっせな！！俺が何したんだよ！雨神のボケ！」
零神がそのままどこかに行った。
「いいのか？」
「構わない。どうでもいいしな。さっさと受付に行くか。」
「神界なのに、受付？」
「まぁ、そう言うことだ。」
「はぁ～面倒だな。」
「そう言うな。」
そして、要と雨神が受付を終わらせた。

「で、何をしたらいいんだ？」
「…まぁ、時間はまだある。ちょっとは緊張を解けばいいさ。」
「分かった…。」

神界の会議…どうせ、またあのバカ神が変な企画考えてるんだろうな。

タッ
と人間の少年が歩いてくる。
「……。」
「…はぁ…集中…。」
要は目をつぶった。
そして、要の目の前にその少年が通りすぎた。
ドクッ！
「！？…。」
「要？…。」
「あっ…嫌なんでもない…。」
なんだ…今の違和感と…恐怖心は…。

１０句　神様会議　２

「はぁ、試験って物なのか？」
「会議というよりはな…。」
「そうか…。」
「いいから、行くぞ。」
グイッ！
雨神が要の手を引っ張る。
「うぅ！！」
それを見ていた零神が。
「何してんだよ！！！！！！」
「！？…。」
「零神。なんだ？」
「な、何で手なんか繋いでるんだよ！！！！」
ハッ！
「！？…。」
パッ！
雨神が急に手を離す。
「…わ、悪かったな。」
「！？…べ、別に。」
雨神と要は頬を赤くする。

ムカッ！！！
「時雨要！！！！！」
「！？…何？」
「俺と勝負しろ！」
「はぁ？」
「俺と、雨神をかけて勝負しろ！！」
「！？…なんで？」

「俺の契約者が成績良かったら、雨神を一日貸してもらうからな！！」
「えっ！！何でいきなり！！」
「いいから！！。」
タッ
「…零、何してる？。」
「！？…。」
雨神達の目の前に一人の少年が現れる。
「刀真！」
「誰だ？」
「俺の契約者だ。」
「…零の契約者の、騎士刀真（きしとうま）。」
「刀真！この時雨要と勝負しろ！！」
「…また、何で？。」
「雨神といちゃついて！！」
「…嫉妬。まぁ、いいけど。」
「……。」
「時雨要君…よろしく。お互い頑張ろうぜ…。」
「あっ、おう！」ニコッ
刀真と要は握手をする。

「絶対負けないからな！！」
「…じゃあ、また後で。」
「おう！」
「…なぜ、私なんだ。」
と４人は別れた。

「それでは、神様会議を始める。」

11句　零の刀

「まず、零神！」
「はい。」
そして、零神と刀真が前へ出る。
「開始！！」

そして、会議（？）というか、契約者の実力会議が開始された。
まずは刀真と零神の所だった。

「…刀真。」
「…。」
零神と刀真の手に模様が出てくる。
零神は天使、刀真は悪魔の模様が出てきて光る。

「すげ。」
「…まぁまぁだな。」
「えっ！！」
要は雨神の言葉に驚く。
「雨神様！」ニコッ
「…忌神！」
「ん？…。」
「…。」ムスッ
「私の契約者！！」ニコッ
「そうか。私は雨神。」
「契約者の時雨要…よろしく。」
「私は、華無鬼羅凪（かなきらな）だ！それと、男ならしゃきっとしろ！！！」
「！？…あっはい！」
「凪。あまりいじめないでよ。」

「分かった。」
なぜか要は怒られた。

刀真は静かに目をつぶっていた。
「……。」
そして、扉から兵士が武器を持って刀真に襲い掛かる。
カキッ！ジャシュッ！
「うわぁ！！」
バタンッ
そして、兵士は倒れていた。
会場に居た全員が、刀を抜いた形跡がまったく見えなかったらしい。
スッ
そして、刀真が静かに目を開く。
ビクッ！
「！？…。」
「要？…。」
「…すげぇ…。」
「はぁ？」
「刀真（あいつ）すげぇ！！」
「！？…。」
要は突然喜んでいた。

「おい！刀真！！」
「…要？」
「お前、すげぇな！！」
「…そうか？要でも簡単に出来ると思うが。」
「俺には出来ないかもしれないけどさ！お前がすげぇ！俺よりも！
俺より強くて俺はお前に憧れる！！」ニカッ！

「?!…要も強い。俺は要が憧れる。」
「!?…そっか、じゃあ俺とお前がライバルだな!」ニコッ
「…そうだな。」

12句　忌まわしい無鬼

「次、忌神。」
「はい。」
次は忌神の所だった。
「では、開始。」

「…チッ。」
「羅凪…。」
「…。」
羅凪と忌神が首にかけてあるペンダントが光る。
ドクンッ！
「！？…。」
羅凪の瞳が赤に変わり、忌神の瞳が青に変わった。
二人の瞳の色が入れ替わった。
そして、刀真と同じように扉から兵士が出てきた。

「あの二人って、相性悪いように見えるな。」
「戻ってきたのか。零。」
「当たり前。」
「おっす。」
「おう…。」
零神と刀真が観客席に戻ってくる。
「忌神も気に入ったから、契約したんでだろう。」
「それも一理あるな。」
「……。」
「あの女の人俺苦手。」

「…なぜだ？要？」
「いや…さっき…とても嫌な事を…。」
「それは災難だったな。」
「えっー、お前冷めてるな…。」ガーンッ
要と刀真は二人で話していた。

そして、羅凪は兵士に囲まれた。

「…羅凪。」
忌神が羅凪の後ろに来ていた。
「三室（みむろ）。」
忌神が持っている人形が動く。

「！？…なんだ！あれ？」
「…人形が動いた。」
「あれは、忌神の大好きな人形だ。」
「へぇ～。」
雨神はやたら忌神の事を知っていた。

「……。」
羅凪の目つきが変わった。

シューンッ！！
「！？…。」
要と刀真が驚愕していた。

「なんだよ…この圧倒…。」
「只者ではない…。」

「……。」
そして、羅凪は人形の口に手を突っ込んだ。
そして、真っ赤な丸い物を取り出した。
「……。」
その丸い物は長剣になった。

「…剣道部部長を甘くみるな！！！！！！」
ジャキッ！！
そして、一瞬にして、兵士が全員倒れていた。

「…雑魚が。」
そして、丸い物を人形の中戻す。

「へぇ～…あいつも俺のライバルだ！」
「…そうだな。」

13句　無世界の紅色

「はぁ～…疲れたぁ～。」

現在、休憩中。（午前の部は終了している。）

「だけど、全員凄いなぁ～。」
「…要は最後か？。」
「そう。」
「精々頑張るんだな！」
「へいへい、どーも。」
すっかり三人は仲良しになった。
バシッ！！
「！？…。」
「なんだ？」
凄い音に皆が振り向く。

「いい加減になさい！私（わたくし）のいう事が聞けないのかしら？」
「いたた…ごめん、ゴメン。」ニコッ
バシッ！
「そうやってニコニコしないでくれます？
はっきり言って、鬱陶しいですわ。この下僕が。」
「ははははは、ごめん。」ニコッ
「だから…その顔が鬱陶しいと言ってますのよ！！」
一人の扇子を持った少女がマフラーをする少女を叩こうとする。
パシッ
「！？…。」
「雨神？」
「いい加減にしろ。」

「！？…なんですの！！」
雨神が扇子をつかんで止める。
「…神が人間をいたぶって楽しいのか？」
「えぇー楽しいですわよ！」
「お前の方が見てて鬱陶しいぞ。」
ムッ！
「なっ！…ふざけないで！！！」
「はぁ、無神！」
「！？…。」
少女の動きが止まる。
「いい加減にしろ。午後の部ももう始まる。」
「零君…。」
「無神。大丈夫？」
マフラーを巻いている少女はさっき叩かれた怪我があった。
「…おい。」
「えっ？」
羅凪が少女に話しかける。
「女は顔を傷つけるものじゃない。」
「あっ…。」
羅凪が少女にハンカチを渡す。
「ありがとう！私、書皇花芽紅（しょおうかめく）よろしくね」ニコッ
「私は、華無鬼羅凪。よろしく頼む。」
「行きますわよ。芽紅。」
「あっうん！ハンカチありがとう。じゃあね」ニコッ
そして、二人は会場に向かった。

「雨神様。私達もそろそろ。」
「そうだな。」
「行くか。」
「…うん。」

「知っている。」
「はいはい。」
そして、皆会場に向かう。

そして午後の部は始まり。
「無神。前へ。では、開始！！」

「下僕なんだから、私は力を貸しませんわ。」
「知ってるよ。じゃあさ。私のために膝まずいてくれる？」
「なっ！この私になんてことを。」
「そんじゃあ行くよ！！」
「本当に、使えない下僕ですわ。」ボソッ
そして、無神が扇子を広げる。
「…隕石～唐突～落ちてくる。」
そして、上から巨大な隕石が降ってくる。

「なっ！！」
「マジか！」
「言霊使いか…。」
観客席の皆には神が張った結界があるから攻撃は当たらない。

「私を甘く見ましたわね。」
扇子で巨大隕石を吹き飛ばす。
「あれれ？まぁ、本来の力はこっちか。」
そして、辺りの風景が変わった。
剣、刃、弓矢、刀、などが刺さっている場所になった。

「これがいい。」
芽紅が取ったのはたまたま落ちていたチェインソー。

「なっ！！神でも死にますわよ！！」
「ははははは、そっかぁ～」ニコッ
「！？…。」
芽紅の姿が一瞬にして消えた。

スッ！
「！？…。」
「私が買ったよ。約束。一週間私のいう事聞く。」ニコッ
「はぁ～…分かりましたわ。」

不思議な二人が仲間になるとはまだ、誰も知らなかった。

１４句　時の雨

「次は雨神様ですか？」
「私で最後か。」
「頑張って下さい」ニコッ
「おう。」
そして、要と雨神は会場のど真ん中に来る。
「うわぁ…緊張してきた。」
「全員、にんじんとでも思っておけ。」
「なっ！…って古い。」
「そうか。」
そして、雨神達は準備をする。
「開始！」
そして、開始した。

「って…どうやるんだよ。」
「いつもどうりにやればいいのだ。」
「それが無理だってんだよ！！」
「私にキレるな。だが、私は力を握っているのか。」
「えっ…あぁ、そうだな。」
「ならば。」
「えっ？」
雨神が要にキスをする。
「！？…。」

観客席では。
「こらぁぁぁぁ！！調子にのんなよ！！！」

「…零。かっこ悪いぞ。」
「うりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
零神は頭に血が上っていた。

「…覚悟を決めろ！！」
「！？…。」
雨神が大声で言う。
「……。」
要は目を閉じる。

守る力…戦う力…俺が求めている力。

ハッ！
要の目つきが変わった。

観客席。
「！？…殺気…。」
「あの男、結構やる。」
「あれれ？…結構手強いかも」ニコッ
そして、皆ははらはらしていた。

そして、要の周りに炎がまとわり着く。
「……。」
「俺に力を…。」
そして、剣が出てくる。
扉から兵士が普通に人数より数人多かった。

「…炎華氷蒼斬(えんかひょうそうざん)！！！！」
審査会場だけが地面が凍った。
そして、上から炎が降って来る。
兵士全員がダウンしていた。

「帰ろうぜ！雨神！！」ニコッ
「そうだな。」

15句　白い月　黒い月

神様会議は無事終わり。
契約者たちは皆帰宅した。
そして、普段どうりの日常に戻る事だった…。

タッタッ。
「……。」
真夜中一人で歩いている忌神。
「誰？」
「……。」
「…違うのかな？まぁ、いっか。」
電柱の下に来る。忌神。
そして、突然忌神の影が動き出す。
「！？…。」
影が実体化する。

「本当は、人間が大嫌い。」
「！？…。」
突然、忌神の声がつぶやく。
忌神の動きが止まる。
「人間なんて、死ねばいいのに。」
「！？…。」
「だから雨神様と居る事にした。」
「！？…違う！」
「その人形も人間の魂が入っているのでしょう？」
「！？…。」
忌神は耳を塞ぐ。

【嫌だ！諦めたくない！私のたった一人の大切な人なんだもん！！】

ドクンッ！
「！？…。」
「違うの？忌神は自分自身の心を閉ざしているのね。」
「……。」
「その人形も人間の魂が入っているけど一度も喋らない。」
「！？…違う！」
「違う？じゃあ何？」
「私は…私は…。」
「じゃあ、死ねばいいじゃない。」
「！？…。」
忌神は地面に座り込む。
「契約者を捨てて。」
「！？…。」
「あなたに契約者なんて要らない。」
「…違う！」
「一体何が違うのよ！！！！」
「！？…。」
「大切な人より、契約者を選ぶ？」
「！？…。」

【ん？お前大丈夫か？】

【えっ？…。】
【幼い子がこんな雨の中で。】
【…大丈夫…。】
【そんなわけないだろう！！私の家に来なさい！！】
【！？…。】

「……。」

羅凪を苦しめるくらいなら…。

「契約を破棄しなさい。」

「…嫌！私は契約を破棄しない！！」
「そう、なら死んで。」
グサッ！！！
「！？…羅凪…。」

バタンッ

「やっぱり、収穫なしかぁ～。」

「…羅……凪……。」

１６句　神だけを狙う事件　１

「忌神！」

現在、雨神、零神、要、刀真、羅凪は神様専用の病院に来ていた。
昨日の夜。忌神が血まみれで道端に倒れていたらしい。

「忌神！起きろ！！」
忌神は重傷の怪我を負い目を覚ますかはまだ不明らしい。
「……。」
羅凪は不安な顔半分に悲しい顔をしていた。

「…だが、妙だな。」
「何がだ？」
「…零神。」
「知ってる。今は神だけを狙う奴が居るんだろう？」
「…嫌な気配はしていたが。まさかな。」
「そうだな。」
「…まぁ、忌神は死なない。」
「！？…。」
「契約者が信じていれば、いつかは目を覚ます。」
「！？…信じていれば…。」
「行くぞ。要。」
「あっ！おい！雨神！！」
雨神と要は病室を出て行った。
「要。私は人間の姿になる。
　この事件が治まらないと。自由に外も歩けないからな。」
「そうか。」
そして雨神は人間の姿に戻る。

普段学校に行く姿だった。
「あっ…そうだ。」
病室を開ける。
「零神。」
「ん？」
「お前、この事件中は女装やめろよ。」
「！？…なんでだよ！！」
「いいから、事件が終わったら何でもいう事聞いてやる。」
「！？……分かったよ。刀真。服屋行くぞ。」
「はいはい。」
そして、刀真と零神は病院から消える。
「お前はどうする？」
「…ここに居る。忌神が心配だから。」
「そうか。ならいいが。」
そして、雨神と要も病院から消えた。

「…忌神…誰なんだ…お前をこんな風にしたのは…。」

ポタンッ

「で、どうするんだ？お前家ないだろう？」
「ある。」
「えっ？いつの間に！」
「要の家。」
「？！…はぁ！？」

「零神は刀真の家に住んでるらしい。なら、私も…。」
「いやいや！あいつら男だろう！お前女！！」
「別に良いだろう？私の事を女と思うな。」
「無理な話だ！！」
要と雨神は周りから見たら彼女、彼氏の関係に見える。
「刀真。どれがいいと思う？」
「1回、試着してみたらどうだ？。」
「それもそうだな！」ニコッ
零神は1回刀真の家に行き、刀真に服を借りそして、服屋に来た。
この二人も周りからはただ仲良しの二人が服を買っているようにしか見えない。
女性には人気があるが。

そして。

「無神。この頃神を狙う事件が勃発してるから。あまり出歩かないほうがぁ～」
「いいじゃないの。私の勝手ですわ。」
「はぁ～…もう。次狙われても知らないからねぇー」
「フン。私が負けるはずないですわ。」
そして、芽紅と無神は離れてしまった。

「次なる、目標（ターゲット）…無神。」ニッ

17句　神だけを狙う事件　2

「本当に鬱陶しい下僕ですわ。」
無神は一人で歩いていた。

「…！」
強い風が吹く。
「見つけた。」
「ん？なんですの？あなたは。」
「死んでくれないか？。」
「はぁ？あなたこの私の何を言ってますの？」
「……。」ニッ
「私に近づかないで！本当に汚い！
人間の分際で…私に…！？」
スッ
誰かが刃物を無神に向ける。
「…いい加減になさい！！」
無神が扇子を振る。
だが簡単によけてしまう。
「！？…。」

「…影操（かげそう）…。」
無神の周りが真っ暗になる。
そして、自分の影が出てくる。

「！？…。」
「本当は、こんな事したって誰も振り向いてくれないってわかってるのでしょう？」
「！？…。」

「なのに、どうして？どうして、あなたは分からないのかしら？」
「！？…嫌！…。」
影が無神に話し始める。
無神の体は震えていた。

「あんたは自分自身が悪くないと思ってる。
だけど、違うわ。本当はあんた自身が悪いと思ってるわ。
それが哀れなのよ！！」
「！？…。」

【あなた、何してるのかしら？】
【ん？…えへへ。】ニコッ
【ボロボロじゃないの。】
【大丈夫です…。】
【私と来なさい。助けてあげるから。】
【ありがとう…。】

「…！？…。」
カタンッ
無神は扇子を落とす。
「…私は…。」

「死ねばいい。」
グサッ！！！
「！？…。」
「…5人目。」

「……芽紅……。」
バタッ
地面に膝が着く。
「！？…グヘェ！！」
血を吐く。
腹を刺されて腹からは血が大量に出ていた。

「……。」
ポタンッ
「…ごめん…なさい…芽…。」
バタンッ
無神は倒れてしまった。

「ははははは…次だ。次！！」

１８句　神だけを狙う事件　３

「……。」
芽紅は顔を下に向けていた。
とても暗かった。
無神は意識がまだ戻らないらしい。
手口は忌神と一緒。

「神だけを狙う事件…身内がこんなに狙われるとはな。」
「次は誰が狙われるか不明だぞ。」
「知っている。」
「……。」
「って！！誰だよ！お前！！」
要と雨神が反応する。
要の家には刀真と見知らぬ少年が来ていた。
「俺だ！！零神だ！！雨神、お前みたことあるだろうが！！」
「いちいち、覚えているわけが無いだろう。」
「なんだよ！！」
「…はぁ～…挑発に乗るバカ。」
「！？…刀真！お前！！」
「…はいはい。」
「で。」
要が話題を広げる。
「事件だけど…。」
「次は誰が狙われるか。」
「それは…。」
「分かった。」

「はぁ！？」
「私が劣りになろう。」
「雨神！それは…。」
「大丈夫だ。私は強い。」
「そう言う問題じゃ。」
「私を信じろ！！」
「！？…分かった。」
「ありがとう。」
要は雨神が劣りの事を納得する。
「……。」
「私が心配か？」
「当たり前だ！！」
「契約者だからな。」
「！…もう！！零！！」
「なんだよ！」
「お前も劣りになれ！！」
「はぁ！？」
「俺と刀真で尾行するから！！」
「……。」
零神は雨神を見る。
「はぁ～…分かった。」
「おっしゃ！！」

「じゃあ、今日の夜実行するぞ！！！！！」

１９句　神だけを狙う事件　４

そして、夜。

雨神と零神は神の姿をして平然に二人で歩いていた。
要と刀真はそんな二人を尾行する。

「なぁ…雨神。」
「なんだ？」
「お前は俺の事どう思ってる？」
「…ただの知り合い。」
「…そっか。」
「なんだ？自分が聞いたくせにしょぼくれるな。」
「悪かったな！！」

「へへへへへ。」
雨神と零神の後ろから不気味な声が響く。
「！？…。」
二人は振り返る。
「やっとか。」
「雨神、足引っ張るなよ。」
「それは、零神もだろうが！！」
二人の影が動く。
「なっ！？」
「マジかよ！！」
影が具現化する。

≪本当は自分自身が怖いんだろう？雨神。≫

「！？…。」
≪私は知っている。正気を失った自分が怖くてショウガナイ。≫
「！？…違う！」
「雨神！挑発に乗るな！！」
≪じゃあ、何でそんなに恐れた顔で否定するんだ？≫
「！？……。」
≪自分自身が怖いなら、死んじゃえばいいだろう？≫
「…違う…私は…。」
≪愛されない死神。≫
「！？…。」

そうだ、誰も私を愛さない。だけど違った。
愛されているけれど、私がそれを拒んでいる。
それが真実だと、最近気づいた。

≪何で、愛情というものを拒むの？雨神？≫
「…呼ぶな…。」
≪何？雨神？はっきりしろよ。≫
「…私の名前を…呼ぶな！！！」
ジャキッ！！
「！？…。」
雨神は傘で自分自身の影を刺した。
「グヘェ！！！！」
「雨神！！」
雨神は血を吐いた。
「そうか…自分自身の影だから…私に喰らうのか…チッなら！」
ジャキッ！グサッ！！！！
「雨神！やめろ！！」

雨神は自分の影を切り刻む、同時に自分自身は血だらけになる。
≪痛い！…痛い！…≫
「黙れ！！！！」
≪…雨神…。≫
「！？……。」
雨神の動きが止まった。

「…雨神……守れなくて…ごめ…。」

「…呼ぶな！！！！！」
カキンッ！！
「！？…。」
「雨神、もうやめろ。」
要が雨神を止めた。
要は剣を出して雨神の傘を止めたのだった。
「雨神、これ以上自分自身を傷つけるな！」
「！？……さい…。」
「雨神？」
「…呼ぶな！…。」
「雨神！！」
「呼ぶな！！！！私の名前を呼ぶな！！！！！！！！！」
「！？…。」
雨神は要を傘で吹き飛ばす。
「…要。」
「俺は、大丈夫だ。だけど雨神が。」
「零。」
「分かってるけど、俺も影が。」
「…お前の影は何も言わないんだな。」

「うっせな！俺は零だからな！」
「…だっせ。」
「なっ！！」
「いいから、雨神を止めるぞ！」
≪…愛してくれ。≫
「！？…。」
≪だけど、無理だろう？雨神自身が拒んでたら無理に決まっている！≫
「！？……違う！…違う！！」
そして、影は変形する。
「！？…。」
カタッ
雨神は傘を落とした。
≪雨神、会いたかったよ≫ニコッ
「…永久…。」

ポタッ

20句　忘れられない人　1

『雨神、大丈夫？』

「永久…。」

≪雨神、会えてうれしいよ≫ニコッ

「…永久。」

≪変わらないね、雨神は≫ニコッ

「！？…。」

≪あの頃から、元気にしてた？≫

「永久！私は…。」

グサッ！！

「！？…。」

≪ごめん、雨神。俺の命令は君を殺すことなんだよ。≫

「…永久…。」

バタンッ

≪ごめん。だけど、殺さないと。≫

雨神は倒れる。

永久になった影は刃物を持って、雨神に刺そうとする。

「……。」

永久…。

≪もう、死ぬの？≫

私は…。

雨神は立ち上がる。
大量の血を流してでも。
≪雨神は俺の事好きだった？≫
「……。」
≪雨神は俺の事愛していた？≫
「……。」
≪雨神、俺は君の事好きだった。≫
「……。」
永久の影は話しかけているが、雨神は黙り込んでいた。
≪！？…≫
雨神は永久の持っている刃物を自分の首に付けつける。
「雨神！！」
要は駆け寄ろうとするが、何かの結界で入れない。
「なんだよ！これ！雨神！」

「殺したければ、殺せばいい！」
雨神は血が大量に出ているのにも関わらず、自分自身を犠牲にする。
≪なっ！…。≫
「私の事を憎いお前なら、私を殺せるはずだ！」
≪！？…。≫
「なんだ？私に情でも沸いたか？」
≪そんな事あるわけがないだろう！≫
「なら、さっさと殺せ。私は自由になりたい。
もう、こんなくだらない世界に居るのはもういやだ。」
≪…なら殺してやる！！！≫
永久は刺そうとするが…。

≪！？…≫
雨神を殺そうとしているのに、手が動かない。
≪なぜだ！！≫
「出来ないのか？人を殺す事はこうするんだ！！」
グサッ！！！
雨神は永久の刃物を持っている手を引き、自分の大量出血している傷に刺す。
≪！？…≫
「…ぅ…グヘェ！！！！！」
≪雨神…。≫
「…帰ろう……永久…。」
≪！？…。≫

「私に…とって…永久は…忘れられない人……だか…ら。」

バタンッ

「雨神！！！」
雨神が倒れた。
傷からは大量の血が流れる。

「……永久……。」

ドクンッ！！

『…私は一人では無いのですね』ニコッ

「……。」

私の…人間の時の記憶？…。

21句　忘れられない人　2

「雨神！！」
要が雨神に駆け寄る。
「…眠ってるだけ？…。」
「雨神！大丈夫か？？」
零神の影はまだ消えていなかった。

≪お前は、どうして自分の意思を隠すんだ？≫
そして、やっと影が喋った。
「別に、俺。弱虫だし。だからあいつが気づくまで俺もまとうかなってさ」
≪どうして？あんな過去を持ってるくせに。≫
「！？…。そうだな…別に。」
≪どうしてだ！どうしてだ！どうしてだ！どうしてだ！！≫
「！？…。」
≪お前はまだ、思い出すんだろう？あの日の事を！！！≫
「！？……。」

あの日…の事…。

真っ赤な空に真っ赤な水に真っ赤な……人間。

「俺は…。」

≪お前が悪い。≫
「だから、俺は。あいつ等のために償いながら生きて！！」
≪それは、償いとは言わない。≫
「！？…。」
≪人は必ず、死ぬ。それだけの事だろう？≫
「違う！！！！」
≪何が違う？一緒の事だよ？そこで死んだら人生が終わる。それだけの事。≫
「違う！違う！俺は…違う！」
≪バカじゃないの？お前一人生きても、誰も悲しまない！誰も喜ばない！！≫
「！？…それでもいい！！俺はそれでよかった！！」
≪なら、死ね！！≫
「俺は、死なない！生きて償い続ける！！」

「ならさ、僕が殺してあげようかはははは。」ニッ
グサッ！！！
「えっ？…。」
「！？…。」
零神から真っ赤なものが飛び散る。
「…零…。」
刀真の所に零神の血が流れてくる。
「！？…。」
ドクンッ！！！
「…刀真…。」

「…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

刀真の周りに雷が走る。

「…刀…真…。」

零神は手を伸ばすが、そのまま意識を失ってしまった。

22句　忘れられない人　3

刀真…悪い。俺はとても弱い。
神として失格な存在なんだ…。
だけど…お前はあの時…。

「……。」
「!?…何?」
「…別に。ただ…。」
「ん?なんだ?」
「…なんでない。」
「ん?お前、人間のくせに人間の匂いがあんまりしないな。」
「!?…別に、どうでもいいことだ。」
「お前、変な奴だな。」
「…そう言うあんたもな。」

それが俺達の出会いだった。

「ん?…。」
零神は少し目を開ける。
「…うわぁぁぁぁぁぁ!!」
「……刀…真?…。」

何で、あんなに…。

「う…。」
零神は立ち上がろうとする。
だが、意識が朦朧としていた。
「…グッ…。」
傷口から血がポタポタたれる。
「…刀真(あいつ)…。」
零神は立ち上がる。
傷口は手で押さえていた。
「零神！」
「要…これはどういう…事だ？」
「俺にも分からない！！」
「はぁ？……。」
零神はゆっくり歩く。
だが、血を出しすぎて思うように動かない。
「…蒼枯灰光(そうこはいこう)…。」
零神が刀真に向けて放つ。

ドクンッ！！
「！？…。」
「…ハァ…。」
零神の傷は跡形もなく消えて行く。
零神が放った光のおかげで、いつしか刀真の雷は消えていた。
刀真は正気に戻っていた。
「おい！刀真！！！」
ゴンッ！！

「！？…。」
零神は刀真の頭を殴った。
「お前、冗談もほどほどにしろよ！！
あんな自分でも制御できない雷なんか、使うな！！
俺は、お前より強い…死ぬ事なんてないんだからな！！」
「？！……分かった。」
刀真はきょとんとした顔をうなずいた。
「なら、いいが。」
「…ごめん。零。」
「別に、俺は…。」

「って、お前らだけ、解決するな！！零神、雨神も治せよ！！！」
「あぁ、へいへい。」
「…要もお節介。」
「うるさい。」

「やっぱり、まだだ。雨神。俺の愛しの姫。」ニッ

23句　再びあの日　1

『やめてください！！どうかこの子だけはおやめください！！』
≪母さん…。≫
『お願いします！！私のたった一人の娘なんです！！』
≪母さん！…泣かないで。≫
『神のいけにえになんてしないでください！！』
≪…母さん…私は…。≫

『僕と来る？。』
≪そしたら、母さんは泣かない？≫
『うん、僕が保障するよ』ニコッ
≪なら、行く。お兄ちゃんは優しそうだから≫
『そっか』ニコッ
信じていた。
あの頃は、他人に警戒心などなかった。
ただ、母さんを泣かせたくなかった。
それだけの事だった――――。

≪お兄ちゃん！！何してるの？ねぇ、離して！！≫
『ごめん、だけどこれが僕の望みなんだよ！
　雨神という神になってよ。』
≪いや！！…いや！！！母さん！！母さん！！！！≫

「……。」
「雨神、起きたのか？」

「要…。」
「大丈夫か？」
「あぁ…うん。」
「そっか、俺もう帰るけど。」
「うん、ゆっくり休め。」
「何か合ったら、呼べよ」ニコッ
「分かった…ありがとう。」
要は帰った。
雨神はあの後、神専用の病院に運ばれた。
雨神は一人病室に居た。
あたりは真っ暗で病院は静かだった。

「で、私に何か用か？」
「僕の愛しの姫に会いに来たんだよ」ニコッ
「私はもう、貴様を信じない。」
「酷いなぁ～、真実を伝えに来たよ」ニコッ
「真実だと？」
「君は人間と関わってはいけない。」
「！？…。」
「そうするだけで、もう世界は全て壊れ始める。」
「だまされない！！私は…。」
「僕だけが姫に教える。ねぇ、桜乃。」
「！？…呼ぶな！！！私をその名で。」
「帰ろう。僕の所に帰っておいで」ニコッ
「断る。」
「桜乃。」
ドクンッ！！！

『桜乃。ありがとう』ニコッ

母さん…。

「帰ろうよ。桜乃。」

「…断る！！」

２４句　再びあの日　２

「桜乃。僕が嫌い？」
「大嫌いだ！お前なんて、信じられない！！」
「そっか。じゃあさ、暗示をかけよう。」
「！？…。」
「僕は永遠に、桜乃が大好きだから。」ニコッ
「…なぜだ！」
「何が？」
「私は、お前を信じていた！！なのに、どうして裏切った！！」
「裏切ってないよ。」
「裏切った！！…。」
「あれは、準備。そして今日君を迎えに来たんだよ。」
「！？…。」
「……。」ボソッ
男が雨神に何かを言った。
ドクンッ！！！
「！？…。」
「帰ろう。桜乃。」ニコッ
「…グッ……。」
雨神は意識を失った。
体だけが動いていた。
雨神の瞳は漆黒の変わった。
「桜乃。」ニコッ
「…お兄ちゃん…。」
二人は病院から消えた。

「なっ！！！雨神が？！」

「…要、病院に行く。」
「わかってる！！」
要と刀真は病院に行く。
ガラッ！！！
「要！と刀真。」
「雨神が居ない！」
「雨神様…。」
「神の結界も破られている。」
「一人で、どこかに行くなんて無理があります！！」
「そうだよな。よし、雨神を探すか。刀真！」
「了解…。」
バタッ！
「刀真！！」
刀真が倒れる。
「大丈夫だ、俺に力を戻しただけだ。」
零神の周りは光る。
「……。」

＜どこに居る！…雨神！！＞

「居た！！！」
「どこに？」
「城。」
「はぁ？」
「刀真、起きろ！！」
「ん？…。」
どうやら、力が戻ったらしい。
「夜の反射に、満月の月の光、そして鏡の破片で城へいける。」
「そんなのどうやって。」

「それの意味は、光の鏡という意味です。」
「えっ？。」
「光の鏡の反対は闇の鏡。その鏡はこの病院の地下に眠ってます。」
忌神が説明する。
「なら、地下室に…。」
忌神の人形が、口から鏡を出す。
「なっ！！！。」
「入ってください。」
「了解！！」
皆が鏡の中に入る。

そして、着いた先が、地獄のような暑い、所だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2926z/

雨の死神

2012年1月14日14時49分発行